

# 実験の装置としてのキャンパス構造について —MIT ウィズナー・ビルディングの建築計画の検討—

首 藤 順 蔵  
デザイン学科

## The analytical studies on campus planning, as the apparatus for experiment

Junzo SHUTO

*Department of Design*

(Received October 31, 1995; Accepted January 10, 1996)

It is difficult to describe the idea, of covering the grand design of campus project, on its placing of the buildings, and on the integration of whole media of up-to-date, and so on. It should be considered the importance of it, as we are now under the construction process for a new art department. This is a case analysis of a campus project, which occurred at one of the representative technological institution of today, the Wiesner Building Project at MIT. I hope this could be a proposal for, and a key in thinking of future campus project of our age.

### はじめに

大学の構築物がそれ自体、思想の表現であるとする考え  
方からは、現在のキャンパス計画の様相は混乱そのもの  
とでも言うのかも知れない。

無論、それらは現実的な思考の産物であり、予算とそ  
の執行、教育方針、将来計画、対外的な広報の必要性、  
等々のある時点における総合的な結果であるには違い無  
いのだが、その決定の過程について思考して見れば、そ  
れはただ現実との妥協の産物とでも言う以外に、その実  
態を表明する言葉を持たないのが実情であろう。

しかし、キャンパスの配置とそこに建造される構築物  
のもたらす表現は、そこに現実携わったひとびとの予  
想を超える意味を持っている様に思われる。決定に携わ  
る人々にとっては文部省令に対応し、その指導に従属し、  
要件を充たすことをもって第一の関門と考えるであらう  
し、その様な法律と条令との狭間にあって、学校それ自  
体が成立することが自明の目的とならざるを得ないであ  
らう。出資者である理事会が権限をもつ資金の規模と存  
在が決定的要因であることは、洋の東西を問わない。

そのようにして残されたキャンパスの構築物は、しか  
しながらその後長くそれを使用する人々、あるいはそこ  
から巣立って、社会的な存在となって行く一群の人々に、  
有形無形の影響を行使して行く。その影響力は校風とい  
った言葉で表現されることもある。

キャンパスの構築物は、その配置に関わるものと、そ

の意匠に関わるものがある。建築の意匠に重きを置く  
学校では、特定の有名な建築家にその設計を委嘱したり、  
あるいは総合大学等の巨大な機構では有名建築家多数に  
よる意匠を競合させて存在を印象づけたりもする。しか  
し、ここではそれよりも現在、より緊急の問題として意  
識されるべき統合の機能のための構造、について考えて  
見たいと思う。

現代のこの時点における芸術の様相は、極めて急速な  
変化の内に不明な未来の姿を求めている状態にあり、電  
子化とデジタル化の要請に全体が巻き込まれて行かんと  
する状況にあると、考えられる。この様な時点において  
色々なメディアは電子化されるであらうし、従来考えら  
れなかった分野までもその将来像の中に含めなければな  
らないかも知れない。電子化の要請が全てであるのか—  
は未だ不明である。そしてそこでは近未来において予想  
を越える激動が待ち受けているものと思われる。その様  
な激動と変化の予測は我々全てがすでに予感しているこ  
とであるけれども、それが具体的にどの様な形態をとる  
ことになるのか、についてその近未来の姿を思い描くこ  
とすら我々は出来得ないでいる。

であるから、教育のプログラムにおいてもそれは実験  
の世紀であり、未知なるものとの対面とならざるを得な  
い。この様な状況におけるキャンパス計画において、大  
きな変化に対応しうる構造の問題は重要である。変化は  
予測されるのであり、そしてその変化に対応し得るもの  
としての構造の問題がある。そのことと、MIT という学

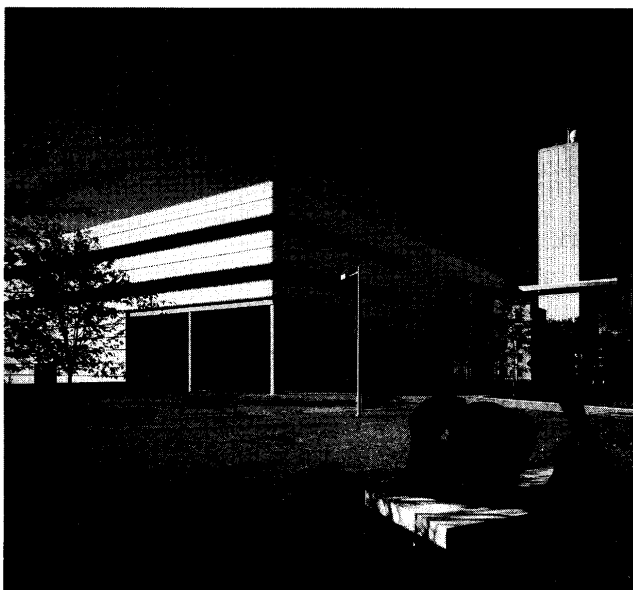


写真1(文献1) フレイシュナー設計の庭園部分から眺めた Wiesner Building。前面の彫刻はヘンリー・ムーア。ベンチの設計はフレイシュナーによる。

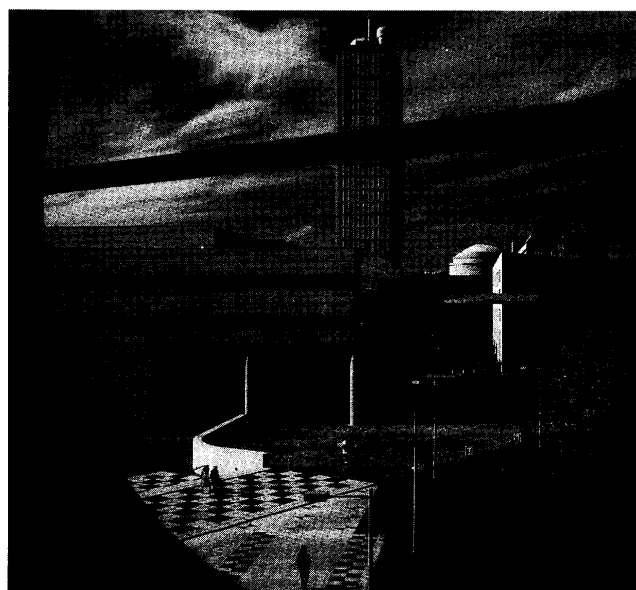


写真2(文献1) Health Science Building—隣接する建物—からゲイトウェイ・アーチを通して見た MIT 本館中心のドーム。この通路が新しいキャンパスの主軸をなす。

校が何故 Media Laboratory を含む Wiesner Building の Campus Project を構想したのか、という問題との対比において考えて見ることは意味のある事と考えられるのである。

## New Campus Project と ウィーズナーと言う人物

Wiesner Building を中心とする MIT の New Campus Project は1979年から発想が検討され、実施に移されて完成を見たのが1985年であるから、その間わずかに5年に過ぎない。この計画は一人の建築家と三人の芸術家とによる芸術と建築との協同の実現であると同時に、それは環境建築、あるいは環境芸術の実現でもあり、また当時の MIT 学長であった Jerome Wiesner (1915-1994) という一人の人物の思想の表現でもあった。

ジェローム・ウィーズナーは人名辞典によれば、アメリカの電子工学者、元 MIT 学長であり、科学者として反核運動の先駆者であると同時に平和への関心、ヴェトナム戦争、SDI(戦略防衛構想)への反対者として知られ、パグウォッシュ会議で活躍した。MIT 学長退任後は故アンドレイ・サハロフ博士等と共に地球問題の解決を目指し、旧知のロシア科学者等と財団の設立に係わった。1994年10月に心臓病の為に死去したと記録されている。進歩的学者、その政治的立場において急進的と目される科学者の一人であった。

現在は Media-Labo と名称を変えている、かつては Architecture Machine Group<sup>#1</sup>と称した一群が主要な入居者となっているこの Wiesner Building は彼の名にちなんで命名されているのだが、成立の記録を読むと、その経過は次の様なものである。

MIT はそのキャンパス内に多くの芸術的資源をすでに持っており、例えば建築学部内の Visual Design による Master's Degree Program とか、Center for Advanced Visual Studies (CAVS)、はかつて Georgy Kepes に率いられ、バウハウスのアメリカにおける遺産として現在も造形教育に影響力を持ち、Center 自体は環境芸術の為の実験を行って来ている。それらの芸術的資源の内には音楽、Computer Graphics, AI、等種々の分野に及んでいるが、それらの中心に Council for the Arts: (芸術評議会)があり、ウィーズナー自身がそれを主宰した。

これら多くの分野における一群の著名な芸術家達と、興味ある仕事上の達成に対し、それらを外部に知らせめまた同窓生や経営陣の間にもその成果を理解させる為の委員会を組織したいとの申出が Alumni Member (同窓生組織)から学長に向けて出されたのが発端であると言う。

学長としてのウィーズナーは、提案を考慮に値すると回答しておいてから、我々は焦点を狭く絞らずに芸術の範囲をできる限り広く取る様に告げたのだった。こ

<sup>#1</sup>「マサチューセッツ工科大学」第8章、アレチネズミ・建築マシン、メディア研究所、P. 161



写真3(文献1) I.M.ペイ, 及びスコット・バートンの共作による地下部分に通じる階段部分。壁面のパネル・デザインはケネス・ノーランドによる。



写真4(文献1) スコット・バートン—Scott Burton の設計した彫刻的、かつ非居住的なベンチとアトリウム、吹き抜け空間。

これらの Member は当時、演劇をその範囲に入れていなかったし、映画は考慮の限界すれすれの処に位置していた。彼等の関心は主として良い展示空間の獲得、及び収集品の質と蓄積とにあった。彼等はウィーズナーの提案に同意し委員会はスタートした。この発足に伴った会合において、Film-Video Section, Architecture-Machine Group, 音楽の分野、その他多くのグループが自身の存在の理由と、活動の内容についての説明を行っていき、その関連するグループの全容についての検証を進めて行くに従って、将来計画の内容はより刺激的な、精神を奮い起こさせるような形態のものとなって行った。芸術評議会自体としては最初何をなすべきかについて検討し、その下にいくつかの委員会を設置することをまず決定した。そのなかには Facilities Committee, Committee for the Support of the Arts, Committee for Public Information about the Arts at MIT, Membership Committee, 等がある。

Facilities Committee はこれら各グループの活動の総合調整と再配置の為の調査を行い、その結果、これらを収容する為の新しい建築を我々は必要とする—ということになった。この時点あたりから計画は具体化し始めたのだが、そのなかにも一つの原則とも言うべきものが計画全体を支配していた。それは全ての分野の活動の一つの建物の中に閉じ込めるのではなく、キャンパス内全域に分散して配置する—といったものであった。

しかしながらその後の体験はこの案があまり適切ではないという結論となり、それには種々の理由があるが、

それはそこを占有すべき人からも、あるいは配置すべき場所からも歓迎されなかったという事情がある。最終的に現在ある各種の活動の一つの建物内に収容する方式を取るようになった。最初敷地内に4, 5個の建物を予定した案は、その後幾多の変遷を経て現在案に落ち着くことになった。

### ウィーズナーの立場

これらの過程のなかで、知的な総合と言うべき爆発的な現象が起きて行ったのは、それが前もって予期されていなかったにしろ、広い意味では場所を含む機会を設定し得た学長のウィーズナー自身の功績と云いえるかも知れない。その様な統合に際しての知的な爆発は未来を指向するこの施設の展開に当たって必要不可欠であったのだが、その様な現象自体が施設の共同使用や重複を避けるための会合を相互に重ねるその行為自身の中から、必然的に発生して行った事に注目すべきであろう。

ここで Wiesner Building の建設のための基金の募集の方法について述べておかなければならない。

基本的には Donner である Abe and Bera List 夫妻の存在と、National Endowment for The Arts, からの基金の配分、参加する各グループからの個別の集金によっている。この Wiesner Building の建設に当たっては、その資金の獲得にそれまでの MIT が行って来た手法とは異なった方法を取っていて、その為はこの建物の建設には、かつての MIT に無かった困難が伴うことになったと言う。ウィーズナーは最高責任者として基金の獲得に

当たったのだが、ウィズナーに取って建築自体の意匠も、あるいは建築家の対外的名声も、その為に望ましい方式であることが必要であったことは明らかである。この様な政治的配慮がやはりこのキャンパス計画の場合にも、ある影を落とす事になっているのは事実である。

出資者の意向が全てでありうる事例は、多くの場合に見出すのであるが、この計画に関して彼が I. M. Pei という建築家を選定したことと、芸術評議会 (Council for the Arts) の下部機構である, Committe for the Visual Arts: (視覚芸術委員会) の Exhibition Director である Kathy Halbreich という人物が 6 人の芸術家の選任の責任を取ったことは、(最初は 6 人で、後 3 人が脱落した) 多くの論争をその後巻き起こすことになった。

私がここで述べておきたい事はその結果としての影の持つ意味についてである。Fund-Raising—資金獲得の為にはウィズナーはある意味でのスター・システムを必要とした—と私は考える。I. M. Pei は、すでに名声の確立した建築家であって、この Wiesner Building は、建築物としてその名声に相応した仕上がりを見せている。しかしながらこの実験の為にキャンパス計画において、無名性を体現した若い建築家の参入を望む意見も同時に存在した。ここではその事の意味について述べて見たい。その為には、現実に完成した Wiesner Building について記述した文章を次に引用して見よう。

「この Wiesner Building は、決定的で強烈な性格を持った建造物である。それはペイ自身による 'Art in Architecture' の主題を形象化したものとも言いうるであろう。それは白くペイントされ、規格化された格子状の平坦な表面を持つ四角形の箱である。四角形とは限定的、閉じられかつ安定した集約的な形態であり、箱としての形と表面の平滑さとは建築自体を自己完結的に外部世界から分離し、自身をその建築の空間内に閉じ込めたものになっている。あたかもそれは包装を解かれていないクリスマス・プレゼントの箱の様なものだ (写真 1)。

建築の内部で行われている事柄は外部からは知ることがほとんど出来ない。その内部空間においても相互の活動は窺い知ることが出来ない。建築それ自体は詰め合わされ、相互に孤立した一群の箱の集合体と言った印象を与える。さらにその内部に神秘的な空間としての Experimental Media Theater が箱の中の箱として暗く近寄り難く組み込まれている」、と言っている<sup>82</sup>。

この様にして、Wiesner Building は Campus Site の中の一つのオブジェとして存在しているのだが、建築自体は優美で周囲の環境とその比例関係において、良く適合

している。その外部壁面の格子状の表面は、意図的になされたものかは別にして、Technology そのものへの隠喩であり、方眼紙と行列論との実証主義的世界を連想させる—とも述べられ、格子状の表面のもたらす空間はその周辺の類似した同様の表面と呼応して、隣接する建物の窓の四角形の、花こう岩のタイルによって組み込まれた空間や、Richard Fleishner の彫刻的な庭園との関連においてそれらを見ることも出来るのである。

フレイシュナー設計の庭園はそれ自体が周囲の Pei や, Giurgola 設計の建築空間との呼応でもあるが、チェス盤状のその格子の敷石面の Pattern は、深層において MIT の位相としてのある感情を喚起する、とする (写真 2)。I. M. Pei は、台湾系のアメリカ人で、建築家としての名声を世界的に確立した人物であり、彫刻的な建築空間の造形の巧みさにおいて知られる。日本においての知名度はそれほどではない様であるが、彼がパリにおいて行った、ルーブル美術館の為に地下活性化計画に見せた手法について記憶している人もいるであろう。リシュリュウ翼やドノン翼を含む地下空間の造形と地上に設定したガラスのピラミッドの形態は、Pei 自身による作品である。

Wiesner にとって、ペイの選択は手堅いものであり、経営的に賢明な選択であったと言うことが出来よう。

建築と芸術との協同の問題に対してもペイは理解があり、また知的な統合の問題に対してもペイによる調整がその爆発のきっかけになっていることは事実である。Wiesner の Media Technology についての見識の広さと、科学者としての総括的な計画の推進の手腕については疑う余地は無いのだが、学長としての彼はその政治的立場から離れることは無かった。それが Wiesner の任務だったからである。

## BARN-TYPE と VILLAGE-TYPE

資金の獲得の為に Star-System とも言うべき事実上の推進の形態から離れた別の視点からの考え方は、主として建築学部の教授達と、Georgy Kepes, Otto Peine によって率いられる Center for Advanced Visual Studies: (CAVS), のあたりで主張されていた。CAVS とは本来、環境芸術を指向し、創作活動もその主題を中心として展開していたのである。

芸術評議会が、その活動の初期に建築学部の Donlyn Lyndon に委嘱した「キャンパス内の芸術の為に施設に関する調査」の結果の報告書は 1976 年の評議会の年次会議に提出されたのだが、その報告には視覚芸術に関する

<sup>82</sup> "Art in Architecture", Designing the Wiesner Building, p. 11-15 by Robert Campbell, Jeffrey Cruikshank

施設の存在の必要性和、音楽と演劇についての同様な要求について論じられていた。彼は同時にその為の施設の建築の条件についての提案を行っているのだが、それには MIT の構内を通過する長い遊歩道としての回廊と、その両側にはアーケードを配置して、それぞれ異なった芸術の形態をアーケードの両面に配置して、全てが有機的に、形態的に結合されている—とするものであったが、この様な提案への賛否は、その時点では半々であったと言う。

いずれにせよ、この調査の結果が Abe and Bera List 夫妻に知らされ、夫妻が援助を申し出たことによって、このキャンパス計画は実現にむけてスタートした。

この様な計画の初期の段階における Barn-type と Village-type と呼ばれる二つの建築計画について、何故、それが Pei による箱状のスタイルと区別されなければならないかについて記述して見ると、それは建築の様式において、構造と意匠を先行させる思考の形式、つまりあくまでも意匠が先行してその内部の活動の形態を必然的にその計画された意匠に従属させようとする、それは自意識と、自己主張の強い建築家の全部が意識下においてそのようであるのだが、その様な実現の方式と、予想される建築の内部空間において行われるべき造形上の活動の実態、それと相互干渉、統合の方式についての柔軟性を優先させる思考、との対決とも言うべきものである。しかしながらここで考えるべきことは、この後者の柔軟な思考は常に対外的な広報と、基金の獲得の要請に対して譲らざるを得ないと言った一般的な事情がある。建築と芸術の統合の問題にも、どちらの意思が強く主張されるべきかは微妙な問題であろう。

建築学部と CAVS の初期の Research-Group はこの芸術的な活動についての柔軟性の主張を全面に押し出しているが、そのことの実現と意匠としての不確定性への要求は、様式についての無名性への指向とあいまって、対外的な見場の良さへの一般的な関心、特に経営的観点からの配慮の前に敗退せざるを得なかったと私は考える。

この二つの方式について説明して見ると、Barn-type とは巨大な、無性格の、デザインされない、Loft-like—屋根裏部屋の様な、構造物であり、その中に MIT の Art-community の種々の様相が「幸福なカオス」の状態において、一般化された空間（特定の目的の為に特化されていない空間）において、時間の経過によって変化する必要によって展開、ないしは相互の連契をおこなう—といったものである。

一方、Village-type の方式はと言えば、Art-center としての機能と概念、それらの芸術的諸活動は community に向けて開かれた小ユニットに分割され、異なったサイ

ズと形態の一群の空間が、束の状態において結合しあっている。あるいはより特化した状態について述べるならば、それらの群としての空間は Art と community の生活との間の最大限の相互交流を得る為に、大学の空間全域に拡撒されるべきである—とする。

Village のなかの cluster—束としての空間は、現在の Pei によって完成された箱状の敷地に具体的に Plan として計画され、図面化された状態にまで達していた。

それらの計画の指揮をとったのは当時の建築学部長であった Donlyn Lyndon である。この計画によれば相互に異なった芸術の諸機能は、歩行者ないし外部の人間から視覚的に確認することが出来る。何故ならばそれらの空間はガラス張りの側面によって、中心の歩行者軸に向かって開かれているからである。それらには空間の延長としての戸外の広場と、屋上の芸術表現および準公共的目的のための解放されたスペースを持っていた。

この Village-type, Barn-type のいずれにおいても、それらの空間で活動する芸術家達と、建築とのかかわりが如何なるものになったかについては述べられていないのだが、無名性、無性格、カオス—混乱あるいは混沌、と言った言葉において表現される状態が、管理的、財務的指向の人間にとって快く響かないであろうことも想像されるのである。このふたつの方式のどれもが、ルーズな弛緩した状態、非形式的、解放された空間としての基本的発想をそれ自体の内部において持っているのである。この計画の最終的な報告書に述べられている通り、Pei の選任は、実現の過程において達成されつつあった art-collaboration—芸術家の協同、の形成の以前においてすでに決定されていたのであった。

## Media-Techinology への見解

学長としてのウイーズナーは、Media-Techinology への見解を問われて次の様に答えている。「私はこの問題を意図的に曖昧に取り扱うことを以て良しとする。その理由はこの建造物の中に重複したセットとしての活動のプログラムを持っているが、それらの中には各種の展示の為に計画、芸術評議会の活動、リスト・ギャラリーの存在等もあり、それらは相互に独立して存在していると同時に、明確に一セットとしてあるのだ。さらに、Media-Techinology もあるが、その内容の定義については、貴方が望むならば Bronz や Paint から始めてもいい。我々が活動の定義を決めるのに、例えば Computer Based-Information System とか、Video-Displays, Color-Printing, Design-Works, などの一連の事象、それら全てを一つの名称で総括する場合、我々は迷路に入ってしまった。一つの傘の下にそれらが知的に、あるいは組織

的に集合した場合、それらの連鎖について何と呼ぶべきかについては決定出来ない。適切な名前を見つけようとするのだが、その都度 Media という名に突き当たる。しかし我々はこの名を拒否し続けた。その理由は貴方や、貴方の同僚達がやってきたことによっている。

それ—Media は検討の期間を通じて適切なものに近い表現の様に思われた。我々は知識を如何に蓄積し伝達し、相互に交流させるかについての興味と関心を何時も、これからも持ち続ける。

一枚の紙片は Media である。同様にラジオ放送の発信器も Media であり、両者は共に知識の伝達者である。我々はもしこの言葉を使い始めるとするならば、それを嫌うことを多分止めたほうが良いのではないか—と言うことになり、そして Media-Technology の内容について語り始めたのだった。それらは一つのグループとなり、組織となり、現在 Media-Technology Laboratory となっている。この建物内には二つのグループの仕事が存在する。一つは芸術のグループ、他は Media-Technology のグループである。しかし、注意深く見るならば、Media-technology の極めて多くの部分が芸術であり、そして芸術は又 technology である。だから、その言葉は Art と Technology 全てについて適合する言葉である」、と述べている<sup>註3</sup>。

ウィズナーは、誰も十年後の Computer の形態を予測出来ないのだから、The Cube (この建物のこと) は今後十年間の為に設計された、この場所における Multi-Media はその期間について納得されればいいのである—と述べ、又我々は変化に対応出来る状態にあらねばならない—とも答えているのであるが、各部門からの要求が、十年後にどの様に変化するかが、面接の質問に対する彼の主要な関心なのであった。

## Wiesner-Building についての見解

ウィズナー・ビルディングの名におけるキャンパス計画は5年の短期間に計画から実現に至っている。その期間の短さは驚異的であり、それ自体が MIT の包含する人材の層の厚みと、その能力と実行力についての表明であると同時に、実現の過程に伴って多くの問題の存在を顕示させることにもなったのである。

この建築物、および Campus-Project は、多面的な問題を提示しており、その一つに芸術と建築の協同の問題がある。建築家 I. M. Pei と、芸術家 Kenneth Noland, Scott Burton, Richard Fleishner の三人 (最初の選任では六人) による協同の実現は成功しており、特に Pei による彫

刻的な建築空間と、Noland による色彩を主題とした壁面の造形において著しい。他の二人についてもそれぞれの達成を示している。これについて論じることは稿を改めなければならないであろう。そしてここにおいて明らかなことは、造形的な完成度と、その内部の活動の自由度と、その形態についての保証は実は別の問題なのである。私は最初このキャンパスを訪れて、造形上の達成の密度の高さに感動し、数回にわたって再訪したのだが、記録を読み進むうちに、内部の人々にとってこの建築物は使いにくいのではないか、と思う様になった(写真3, 写真4)。

そこでこの稿の主題である「変貌の目的の為の定型」とは何か—、と言う設問に突き当たることになる。

明確に言い得ることなのだが、これを決定した人、決定権を行使し得た人々は組織としての体面、見栄、外見の良さを重視した。集金のために、対外的な訴求力のために、それは必要であったのかも知れないし、その目的は実現されているのだが、内部の活動としての Media の統合の視点に関して言うならば、知的、感性の爆発的な交流の目的に叶っているかどうかはこの建物に関する限り疑問である。その事は芸術的な実験にとって、外部的な衣装は真に必要なかという問題でもあり、Pei の建築は少なくとも、内部的に孤立した空間の集合となってしまう様に思われるのである。

Donlyn Lyndon を Leader とする MIT の建築学部による二つの方式、Barn-type, と Village-type の Campus 空間への提案は (CAVS) Center for Advanced Visual Studies も初期の段階からそれを支持して来た。

これら二つの方式は芸術の内面の欲求により良く答えている様に私には思われる。変貌の目的の為の定型への探索において、造形的な完成をその器自体に求めすぎることは、あるいは矛盾した行為であるのかも知れない。CAVS は建築家の選任について異議をとなえ、Committee for Visual Arts の Kathy Halbreich によって六人の芸術家が選任される時点でこの計画から手を引き域外に去った。バウハウスの後進としての Kepes を始めとするグループの構想の実現は此処には無く、影響力の発現の機会を失われた。代わりに Media Laboratory の一群が登場し、主役は交代したのである (写真5)。

## われらのキャンパスについて

私の属する芸術学部においても、新しいキャンパスの建設が進行中である。Media-Art は新芸術学部の探究の主題でもある。Wiesner-Building との対比において、こ

<sup>註3</sup> Interview : to Jerome Wiesner, Designing Wiesner Building, p. 25-28



写真5 (文献1) ゲイトウェイ・アーチ—Gateway Arch—本館と共に I.M.ペイによる設計。主軸としての歩道空間をシンボライズする門。



写真6 (文献1) リチャード・フレイシュナー—Richard Fleishner 設計のプロジェクト・ベンチ。チーク材及びスチール。

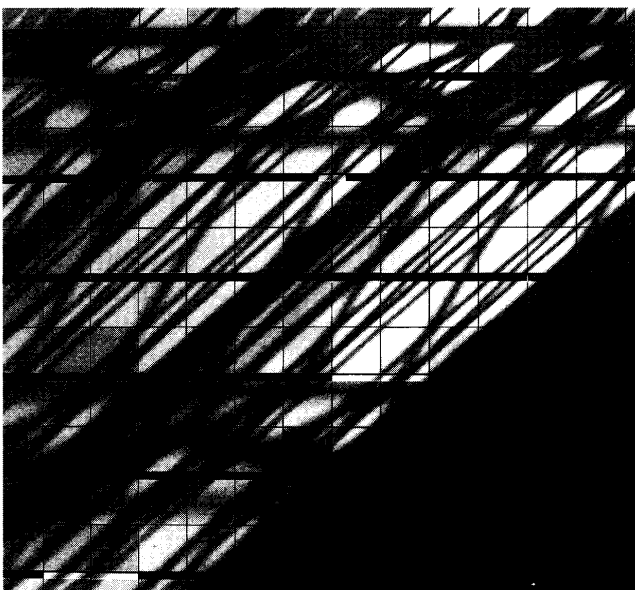


写真7 (文献1) ケネス・ノーランド—Kenneth Noland—設計の色彩を主題としたアトリウムの内部壁面に上部天井からの自然光が陰映を与えているところ。

れまでに述べた二つのキャンパス構造の方式について検証して見ることは意味のある事と思われる。

中野キャンパスは典型的な Urban-Site であり、狭い都市的な空間に、既存の建物を利用して再生を計らねばならないと言う制約を条件として持っている。ここに Wiesner-Building の Campus-Project の初期に登場した Barn-type と Village-type の構想を当てはめて見たらどうであろうか。

キャンパスの敷地の狭さは、全体を Barn-type, 納屋のスタイルとして構想することが妥当であると思われる。Pedestrian-passage (歩行者通路) を中心軸にとり、その周辺に Cluster—束として多様な空間群を配置する方式は、さらに広い空間において可能であるから、中野キャンパスにおいて実現することは難しいであろう。また現在存在する建物は、過去恣意的に計画され継ぎ足されて完成して行ったものであり、それら既存の建物の内、将来残すべきものと、取り壊すべきものとの取捨選択の検討は不可欠であろう。敷地内において将来展開される活動の実体は MIT に於けるそれと本質的には同じであるから、中野キャンパス内のどの位置からも専攻を問わず、全体の状況がガラス張りで、共通空間としての広場に向けて開かれたスペースを通じて見渡せることが望ましいのである。

建築上の規制や、地域的な制約を恐れずに述べるならば、あるべき姿としての構想としては、狭い敷地全体に北に向けて傾斜したガラス張りの片流れの屋根を掛け、Campus 全体を Barn—納屋として、その内部空間全体を一つの構造物として取り込んでしまうことであろう。

これによって、全体の構造自体は単純なものとなる。その上で、老朽化した建物や、不要の構造物を整理し、中心部分に Experimental Media Theater としての広場、あるいは展示空間を兼ねる Atrium—吹き抜け空間を確保する。この広場を中心に、それを囲む形で多種類の目的に叶った空間を配置し、それら相互の活動による啓発と、交流とがそこに集う全ての人々によって相互に

視覚的に確認される様な構造が望ましく、そこでは将来起こりうる多くの変化についても、丁度 Parts を取り替え、新しい Unit と差し替える様にして、時代の要請に答える変貌を瞬間的に行いうることが、本来的に求められているのであろう。

現在建築中の図書館も、本館も、全てがこの新しい片流れのガラスの天蓋の下に取り入れられて、全体の一部となり、クラブも工房も暗室も食堂も、この展示空間としての広場の周辺に適切に配置される。北に面した境界は垂直に削り取ってさらに地下部分を開発することが可能であろうし、その様にして図書館の背後の空間も活用することが出来るかも知れない。中野キャンパスの狭い空間は、その Urban-site としての狭い空間故に、極限まで活用する為の工夫が求められるのであろう。

本来、創作の為の探究はカオス—混乱の内にあり、その目的の為にはあまり限定された、固定的な空間よりも、ルーズな自由に変化し得るものが望ましいのである。しかしこの様な Barn-type によって単純化され Flexible に構造化された建築空間が、優れた建築的な表現を仮に、将来具えることが出来るならば、それは又望外の喜びなのである。

これとは別に、厚木のキャンパスでは、Village-type の様な構成が可能なのではないだろうか。その場合にも、工学部を含めた専攻の再編成とか、工房の増設、建物の高層化と言った問題を含み、いずれにしても、その構造

は活動の主体となる人々、教師と学生の最大限の自由と目的の為の機能を兼備したものとなるべきであろう。

## おわりに

キャンパスの構造の問題はこれまであまり論じられることが無かった様に思う。それには論じても無駄だった空気があったことも事実であり、計画が活動の主体であるべき人々とは無縁の場所で進行したりする事実を見て来たことにもよっているのである。しかしながら、当事者としての内部の人間にとって、これは大切な問題である。本来あるべき姿について、もっと事例を集め研究されることが望ましいと考える。MIT の Wiesner-Building のケースは、創作の活動の為の空間構造についての問題、あるいは芸術教育の問題について検討する一つの鍵を提供してくれていると思われるのである（写真 6、写真 7）。

## 参考文献

- 1) Designing the Wiesner Building: Committee on the Visual Arts, MIT Press; 1985  
and its attached Brochures;
- 2) 「マサチューセッツ工科大学」フレッド・ハブグッド 鶴岡雄二 (訳), 新潮社 1995
- 3) THE MEDIA LAB: Inventing the Future at MIT, Stewart Brand, Viking Prnguin Inc. 1987